# ウルトラマンネクサス☆マギカStrikerS

ゼロディアス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ウルトラマンネクサス☆マギカＳｔｒｉｋｅｒＳ

【Ｎコード】
Ｎ６３６４Ｙ

【作者名】
ゼロディアス

【あらすじ】
アルティメットダークザギをウルトラマンノアが打倒し数年後、ナイトレイダー達はビーストの反応をキャッチした為ある森へ行くのだが、そこで正体不明のビーストにヒメヤとマミは襲われ、マミはそのビーストに捕えられてしまい異世界「ミッドチルダ」へと連れ込まれる。
その世界でも怪獣やビーストの脅威があった……。
この作品は「魔法少女まどか☆マギカ―ＮＥＸＵＳ―」の続編です。
先にそちらをお読みになってからご覧ください。

## 1話　『異世界―ザ・ワールド―』（前書き）

つい書いてしまいました……。

ＯＰ「青い果実」
ＥＤ「赤く熱い鼓動」

## 1話　『異世界―ザ・ワールド―』

ミッドチルダ第8空港という場所で大火災が発生していた。

そこでは青い髪の少女「スバル・ナカジマ」が泣きながら炎の中を歩いている。

「うえっく、ひっく、おねえちゃんどこ〜？」

スバルはどうやら姉を探してるらしく、すると突然スバルのすぐ近くで爆発が起こり、吹き飛ばされる。

「きゃああ！！？　うう……もうヤダよ、帰りたいよぉ」

スバルの背後にあった巨大な銅像が突然足場が崩れ、その銅像はスバルに一直線に向かい落ちてくる。

「……あっ！？」

死を覚悟するスバルは、目を閉じた。

しかし、何時まで立っても痛みは来ない。

恐る恐る目を開けて見ると、赤と青の身体を持ち、頭の上に2本のブーメランの様なものをつけた銀色の顔をしている戦士が両手で銅像を抑えつけていた。

「よう、大丈夫か？」

その戦士は力一杯銅像を投げ飛ばし、少女の方へ振り向く。

「来るのが遅くなっちまったな。　でももう大丈夫だ」

右腕を伸ばし、その後L字に組んだ腕から光線が放たれ天井を撃ち破った。

「シェア！！」

戦士は少女を抱えて撃ち破った天井からスバルを連れて抜け出した。

スバルはその戦士を見て輝かせていた。

「あの……、あなたは……？」

スバルは戦士に向かって名を尋ねる。

「俺か？　俺は……ゼロ、ウルトラマンゼロだ」

＊

「邪悪なる暗黒破壊神アルティメットダークザギ」を倒して数年後、怪獣や異星獣・スペースビーストに対抗する組織「TLT」を「ウルトラマンネクサス」の初代『適合者（デュナミスト）』「ヒメヤ・シュン」と2代目デュナミスト「ヒメヤ・マミ」、「ウルトラマンティガ」「鹿目

まどか」、「ウルトラマンダイナ」「美樹さやか」、「ウルトラマンガイア」「佐倉杏子」、「ウルトラマンアグル」「暁美ほむら」の6人中心となって設立。

ビースト達と戦うチーム「ナイトレイダー」である隊長ヒメヤと副隊長のマミはビーストが出現した為他の仲間と共に出撃。

とある森に反応があった為着陸して調査を行う。

ダークブルーの隊員服に身を包んだヒメヤとマミはビーストを探し始める。

「中々見つからないか……」

「えぇ」

だがその時、突然空にワームホールが現れ、そこから触手がヒメヤとマミに襲い掛かってきた。

「きゃあ！？」

マミとヒメヤはとっさに避けて触手を銃型の武器「ディバイドランチャー」で撃ち、触手は千切れる。

だが一瞬の隙をついてマミは触手に囚われてしまい、ワームホールに引っ張られる。

「くっ……！？」

マミはエボルトラスターと呼ばれるアイテムを取りだそうとしたが、それよりも先に触手の動きが早くワームホールに飲み込まれてしま

う。

ヒメヤはマミを助けようとディバイドランチャーで触手を撃つが当たらずマミはそのままワームホールの中へと吸い込まれてしまった。

「マミイイイイイ！！！」

＊

「う……んっ？」

マミが起き上がるとそこは森の中であり、マミは倒れこんでいた。

「アレ？　私……どうしたのかしら……？」

マミは辺りを見回すが先程の邪悪な雰囲気が漂う森と違い、この森は太陽が差し込み、明るい森になっていた。

だがマミは短剣の様なアイテム「エボルトラスター」を取りだし、そのエボルトラスターは「ドクン」と心臓の様な音を立てていた。

「ビースト反応ね」

それはビーストの反応があることを示しており、反応のする方へと歩いて行くとサソリの様なビースト、「クラスティシアンタイプビースト・グランテラ」が街に向かい進行していた。

その進行を止めようよするかのように空中に浮いた人間が手に持ったアイテムから光線などを放ちクトゥーラの進行を阻止しようとしている。

「人が空を飛んでるなんて……。　って、キュゥべえがまだいたらあんまり不思議なことに見えないのかもね」

かつて自分達に詐欺行為を行った生物を思い出したが、そいつ等は全てヒメヤの変身したウルトラマンノアにより感情を埋めつけられて送り返された。

「全然効かないよ、ティア！」

青い道「ウイングロード」に乗った頭にハチマキを巻き、腕には機械的な少し大きめの腕が装備されてローラーの様なものを履いたあの少女……、１５歳となった「スバル・ナカジマ」がオレンジの髪をして２つの銃を持った少女「ティアナ・ランスター」に呼びかける。

「こいつの身体が硬すぎる……！」

実はこの世界はあの魔法が発達したミッドチルダから数年後の世界であり、マミはその世界に飛ばされたのだ。

「なにはともあれ助けないとね。　あのビーストと戦うのは少し抵抗あるけど……」

グランテラと戦っていたのはかつての仲間であるバスターグランテラと似ているからだろう。

マミは鞘に収まった短剣「エボルトラスター」を取り出し、鞘から引き抜く。

「うおおおお！！！」

光に包まれたマミは胸にY字のクリスタル、銀色の身体をした光の巨人……「ウルトラマンネクサス・アンファンス」に変身し、グランテラの前に現れる。

「シェア！」

ネクサスの登場にグランテラに攻撃を行っていた魔導師達は驚きを隠せず、巨人をただジッと見ていた。

「ウル……トラマン」

スバルはそう呟き、ネクサスは腕を交差させて高速で動く「マッハムーブ」を使いグランテラに一気に接近し右腕を光らせて繰り出す「アンファンスパンチ」をグランテラに叩きこむ。

「シュア！！」

「ギイイイ！！？」

殴り飛ばされたグランテラ、ネクサスは周りを見て状況を確認。

（ここならメタフィールドに巻き込まれずに済みそうね）

ネクサスは右腕を胸のエナジーコアまで持って行き、振り下ろすとパワーとスピードとバランスに優れた形態、「ジュネッスシルバー」へとスタイルチェンジ。

「はあああ……ジュワッ！」

右腕を振り上げると光が放たれ、ネクサスとグランテラを包みこむ。

そこは荒野が広がった空間……、ネクサスが戦いやすく、周りに被害を与えない為の場所「亜空間・メタフィールド」の中でネクサスとグランテラは対峙している。

「ハアアア……！」

ファイティングポーズをした後、グランテラに勢いよく走って行くネクサス。

「シェア！！」

## 1話　『異世界―ザ・ワールド―』（後書き）

ヒメヤ
「って俺も出番なしか！？」

マミ
「私1人って心細いんですけど……」

さやか
「あぁ、だってぼっちだもんねぇ」

マミ
「もうぼっちじゃないわよ！」

ほむら
「でも本編のあなたのあの状況はぼっちよね」

マミ
「ｏｒｚ」

## 2話　『起動六課』（前書き）

タイトルは時々ネクサス仕様です。
因みにグランテラとの戦闘はやっぱり4話くらい引っ張りますよ！
取り合えず後2回出て来ますね。

## 2話　『起動六課』

メタフィールド内、グランテラはこちらに接近するネクサスに青いエネルギー弾を両手から発射しようとするが、それよりも先にネクサスはジュネッスシルバーキックという強烈な蹴りをグランテラに炸裂させる。

「シュア！！」
「ギイイイ！！？」

倒れこむグランテラ、立ち上がった時にはネクサスが掴みかかって来ており、振り払おうとネクサスの背中を殴りつける。

「デアッ！？　ハア！！」

しかし、ネクサスは力を込めたパンチとキックをグランテラに叩きこませる。

「ギュオオ！！」

ネクサスを投げ飛ばすグランテラだが、ネクサスは倒れず着地。

するとグランテラは頭の上まで乗っている尻尾を降ろし、その尻尾でネクサスを叩きつけようとしてくるがネクサスは軽くジャンプして避け、腕に装備された「アームド・ネクサス」から光の刃、「パーティクルフェザー」をグランテラに炸裂させる。

「ハッ！」

さらにグランテラに一気に接近し、強烈なパンチを喰らわせた。

「ギイイイ！！？」

「シェア！！」

グランテラは自分の両腕のハサミでネクサスの両腕を挟みつけ、ネクサスは投げ飛ばされる。

「ヘアッ！？」

「キイイイ！！」

さらに尻尾の先端から火球をネクサスに放つ。

「デュッ！？」

両腕のアームド・ネクサスから2本の光の剣「シュトロームツインソード」を出し、ネクサスは自分に放たれる火球全てを切裂きかき消すが……。

「シュア！？」

遂にその一撃がネクサスにヒットし、大きく吹き飛ばされる。

グランテラはすぐに次の火球を放つ準備を行っており、ネクサスはそれに気付いてすぐに立ち上がり両手でエネルギーを溜めて腕を十字に組んで発射する光線「クロスレイ・シュトローム」を発射し、グランテラに大ダメージを与えた。

「ギオオ！！？」

今の場合はオーバークロスレイ・シュトロームの方が確実に倒した技だが、速効で放ててそれなりに威力のあるクロスレイ・シュトロームをネクサスは選んだのだ。

「はぁ……はぁ……」

その時だ、空中に暗黒の雲がグランテラの頭上に出現し、そこから青い光が落下。

その光の中から鎧を纏った青い巨人が姿を現した。

（あれも……ウルトラマン？）

確かにその巨人はウルトラマンに似た姿をしており、青い巨人は右手を掲げてエネルギーを右腕に装着されたブレスレットに溜め、ブレスレットに左手を重ねた後腕を十字に組みあわせて発射する光線がネクサスの足元に放たれた。

「デュワア！！？」

その衝撃で土煙が起こり、そこにはグランテラと青い巨人はいなかった。

「……」

ネクサスは両腕を交差するとメタフィールドと共に消えて行き、マミの姿へと戻った。

「やっぱりグランテラは強いわね……。　さて、後はどうするか……」

マミがこれからどうしようかと悩んでいる時である。

「あの、すいませーん！！」

「んっ？」

マミが後ろを振り返るとそこにはスバルとティアナがこちらに向かい歩いて来ていた。

（あっ、さっきいた……）

「あの、ここはビースト出現の為に立ち入り禁止区域にしていたんですがどうやって入ったんですか？」

ティアナがマミに質問をすると……。

「あの、質問を質問で返して申し訳ないんだけど、ここどこかしら？」

苦笑いしながらスバル達に質問を返すマミ。

「ティア、この人ってもしかして次元漂流者？」

「かも、しれないわね」

「次元漂流者？」

マミは聞きなれない言葉に首を傾げる。

「まあ、詳しい話は私達の所属している部隊で」

「部隊って……あなた達軍人かなにか？」

ティアナは「似た様なものですね」と答えた後、その部隊「起動六

課」へと向かった。

＊

「そう言えばあなたのいたあの場所って丁度あの巨人がいた場所なんですけど……、あの巨人がどこに行ったか知りませんか？」

スバルが不思議そうにマミに尋ね、マミは当然「えっ！？」となる。

正体をバラす訳には今の所いかない。

「えーっと……飛んで行ったわ」

指を空に向けながら、空へと飛んで行ったと答える。

「空に……ですか」

「ええ」

起動六課と呼ばれる部隊についた後、その部隊の部隊長の部屋へとマミだけが入った。

「私が起動六課の部隊長の八神はやてです」

貧乳狸……では無く茶髪の関西弁を喋る若い女性「八神（やがみ）はやて」がマミに向かい挨拶をする。

「ヒメヤ・マミです」

その後、はやてから次元漂流者とは自分のいた世界から別の世界に飛ばされてしまった迷子の様なものだというのを聞かされたのだが……。

「なんだか少し違う気が……、どっちかって言うと迷子というより連れて来られた……なんですけどね」

「んっ？　どういう意味や？」

とその時、部隊長室に金髪のマミにも負けないぐらいのスタイルのいい女性「フェイト・T・ハラオウン」が入ってきた。

「失礼します。　はやて、その人が次元漂流者の？」

「そや、ヒメヤ・マミさん言うねん。　あれ？　なのはちゃんは？」

「なのは……」

フェイトははやてに耳打ちし、はやては頷く。

「あの、なにか？」

「あっ、ごめんなマミさん。　気にせんといて」

＊

その頃、先程の森の中で等身大の赤と青の身体を持つ戦士、そう、あの「ウルトラマンゼロ」が自分の目の前にいる敵を睨みつけていた。

「テメー等のアジトはどこにある？」

その目の前の敵とは「ウルトラ兄弟」と呼ばれるウルトラマンのにせロボット、「にせウルトラマンタロウ（ＳＲ）」と「にせウルトラマンレオ（ＳＲ）」「にせウルトラマンアストラ（ＳＲ）」「にせウルトラマン８０（ＳＲ）」であった。

「ジュワッ！！」

にせタロウが動きだし、ゼロへと殴りかかって来たがすぐに避けてゼロはにせタロウの腹部を殴りつける。

「ウグッ！？」

「まあ、喋る訳もねえか。　いっちょ派手に行くぜぇ！！」

「イヤー！！」

「ハイー！！」

レオとアストラが同時にゼロへと襲いかかり、２人のキックがゼロに決まる。

「ぬわあ！？」

「ショワッ！！」

にせ８０は右手から光の輪の様な「八つ裂き光臨」をゼロに放ったがゼロは頭の２本のブーメラン、「ゼロスラッガー」を構えて八つ裂き光臨をかわし、ゼロスラッガーを操って投げる。

「シュッ！　デュア！！」

ゼロスラッガーはにせレオ、にせアストラ、にせ８０、にせタロウに切裂かれるがまだ倒されていない。

「ニセモノ如きに……負ける俺じゃねえぜ！！」

## 3話　『魔女ビースト』（前書き）

グランテラとの決着今回でついてしまった……。

## 3話　『魔女ビースト』

起動六課部隊長室、マミの話を聞く限り、マミのいた世界はなのはとはやての出身世界でフェイトもしばらくそこで暮らしたことのある彼女達と同じ「地球」ということが判明したのだが、ナイトレイダーやビーストに怪獣の存在は世間に一般的に知られている、しかし、怪獣やビーストが出現するのはこの世界だけでなのは達の地球はマミのいた地球とは全く違う世界なことが判明した。

「それでなマミさん、マミさんの地球が判明するまでウチで保護したいんやけど……構わへんかな？　それに色々とビーストとかのこと詳しそうやし話聞かせて欲しいわ」

はやての言葉にマミは頷いた後、フェイトに案内されて隊舎の中を探検することに。

歩きながらマミはフェイトに魔導師のことなどを説明。

そしてこの部隊はロストロギアと呼ばれる危険な兵器の1つ「レリック」を回収する組織だというのを聞かされた。

途中、スバルとティアナ、それに赤い髪の少年「エリオ・モンディアル」とピンクの髪の少女「キャロ・ル・ルシエ」とその近くに白い小さな竜「フリード・リヒ」の「フォワード」と呼ばれるチームが自主練をしていた。

「あっ、あなたさっきいの！」

スバルがマミに気付き、フォワード達はマミとフェイトの元へ行く。

「こんにちわ、さっきは申し遅れたけど、私の名前はヒメヤ・マミよ。　よろしくね」

フォワード達に微笑んだ後、スバル達は自己紹介をする。

「スバル・ナカジマです！」
「ティアナ・ランスターです」
「エリオ・モンディアルです」
「キャロ・ル・ルシエって言います、この子はフリード」
「きゅく～」

マミはフリードを見て頭を撫でた。

「あら、可愛いわねこの子」
「えへへ、ありがとうございます♪」

そこで茶髪の1人の女性がこちらに歩いてくるのが見えた。

「あっ、なのはー！」
「フェイトちゃ～ん」

女性の名前は「高町なのは」であり、スターズとライトニング、2つあるチームの内のスターズの隊長である。

「どうだった？」
「ダメ、ゼロと一緒に行ったけど結局ゼロが全部破壊しちゃって敵の居場所が分からなかったよ」

しょんぼりするなのは。

「あの、マミさんって軍人なんですか？」
「んっ？　ええ、まあそんな所かしら？　ただ……私が戦うのは怪獣やビースト、侵略にくる宇宙人とかなんだけどね」
キャロの質問にマミはそう答える。
「マミさんの世界にもビーストがいるんですね」
「えぇ、フェイトさんに聞いたけどこの世界にもウルトラマンはいるのね」
恐らく、ゼロのことだろう。
そしてマミはフォワードに自分の世界のウルトラマンのことについて話し始めた。
念の為に正体は伏せたが。
「どうして……ウルトラマンは私達の為にそこまでするんでしょう？」
静かにマミに問うティアナに、マミは……。
「きっと、ウルトラマンは人の中にある『光』を守りたいんだと思うわ」
「光……？」
「えぇ、光ってね、誰の中にでもあるものなの。　例え住む世界が違えど……」
そこで六課の警報が鳴り響く。

どうやらグランテラが現れたらしく、街に向かい進行していた。
桃色の髪をして凛々しい顔立ちをした女性「シグナム」と赤い髪の少女「ヴィータ」がなのは達の元へやってくる。

「出撃だな」
「んっ？　そいつははやての言ってた……」
「ヒメヤ・マミです。　あの、お願いがあるんですが」
マミはシグナムとヴィータに向かいある事をお願いした。
それは自分も戦いに参加させてくれという物だった。
「しかしだな、幾ら元の世界でビーストと戦っていたからと言っても君は丸腰だ。　武器は落としてしまったんだろう？」
この世界に来る時、マミは殆どの装備を無くしてしまっていた。
「でも……！」
「大丈夫、ここは私達に任せてください」
なのはが言い、なのは、フェイト、シグナム、ヴィータ、スバル、ティアナ、キャロ、エリオが出撃した。
起動六課先程も言った通りレリックを回収する部隊だが、怪獣などが出れば他の部隊の魔導師と共に出撃する。

＊

「ギイイイ！！」

グランテラは相変わらず街を目指して森の中を進行しており、到着した魔導師姿のなのは達が一斉に攻撃を行う。

「「ディバイン……バスター！！」」

ピンクの杖の「レイジングハート」を構えて桃色の砲撃をグランテラに放つなのは。

スバルは腕のリボルバーナックルからなのはとは違う青いディバインバスターを放つ。

しかし、やはりグランテラは硬く全く動じていない。

「そんなっ！？」

「やっぱり硬い……」

巨大になったフリードの背中に乗ったエリオとキャロ。

「あんまり接近しすぎたら危険だよね」

「うん……」

その為エリオとキャロはフェイトの指示もあり、弱点を探ることにする。

「ハーケンセイバー！！」

斧型のフェイトが所有するデバイス「バルディッシュ」から金色の刃をグランテラに飛ばすがやはり大したダメージは与えられない。

「このやろおおおお！！！」

ヴィータがハンマー型のデバイス「グラーフアイゼン」を使い、グランテラの頭を殴りつけたが、それに少しキレたグランテラがヴィータに向かい鋏で攻撃をしてくるが、ヴィータはすぐに空高く飛び上がり避けた。

「紫電……一閃！！」

剣型のデバイス「レヴァンティン」を鞭のような形態にしたシグナムが、それによる斬撃を放ち、グランテラの頭に直撃させたが、せいぜい鬱陶しいくらいにしかグランテラ思っておらず、シグナムに襲い掛かる。

シグナムは避けようとするが、グランテラは尻尾の気門から火球を発射。

「くっ……避けるのが間に合わん！！」

「シグナムさん！！」

なのはが左腕についたブレスレットでなにかをしようとした時、六課の人気のない場所にいたマミがエボルトラスターを引き抜き、掲げる。

「うおおおお！！」

光に包まれたマミは銀色の巨人「ウルトラマンネクサス・アンファンス」となり、シグナムに火球が直撃する前に火球に光の柱が激突し、その柱が消えて行きその中からネクサスが現れる。

ネクサスはジュネッスシルバーにスタイルチェンジし、強烈なパンチをグランテラに浴びせて殴り飛ばす。

「ギュオオ！！？」

「シュア！」

ネクサスはグランテラに接近した後、途中で立ち止まりメタフィールドを発動する。

だが……。

「デュッ！？」

メタフィールドは闇の空間「ダークフィールドG」に塗り替えられてしまう。

「ギュオオ！！」

ダークフィールドG内でネクサスとグランテラは戦闘を行い始めるが、ネクサスがやや苦戦している。

グランテラはネクサスを殴り飛ばす。

「シュワ！？」

だがネクサスは膝蹴りをグランテラに決め、うずくまったグランテ

ラの背中を踏み台に背後に回り込み背中に蹴りを喰らわせる。

「デアッ！！」

「ギイイ！？」

さらにネクサスは両手にエネルギーを溜めて腕を十字に組んでクロスレイ・シュトロームをグランテラに発射し、グランテラは倒れこんだが……。

空中から黒い光がグランテラに注がれる。

（一体なにが起こってるの……？）

するとグランテラがパワーアップして立ち上がった。

（この空間が力を与えてるのね……）

「ギュオオ！！」

グランテラは腹部の気門を開き、合計６つの火球をネクサスに放つ。

「シェアッ！！」

ネクサスはバク転などをしてかわし、アームド・ネクサスからシュトロームツインソードを出して火球を切裂くが１発が当たり吹き飛ぶ。

「デアアアッ！！？」

グランテラはネクサスの首を右手で掴み、、左手でネクサスを殴りまくる。

「グアッ！？　ダア！？」
「キイイイ！！」
ネクサスを地面に叩き落とし、倒れこんだネクサスをグランテラは蹴りあげる。
「デュッ！？」
仰向けに倒れたネクサスをグランテラは踏みつけ、ネクサスのエナジーゲージが点滅を始める。
「グウウ……」
再び首を掴まれて無理やり立たされ、ネクサスはグランテラに殴り飛ばされる。
「デュワア！？」
それでも諦めず、立ち向かってゆくネクサスだが、グランテラはネクサスの攻撃を一切受けつけず、その長い尻尾でネクサスを叩き飛ばす。
「デュワアア！！？」
地面を削りながら吹き飛ばされるネクサスだが、それでも倒れず立ち上がる。
ダークフィールドGはグランテラをさらにパワーアップさせ、尻尾と腹部の気門から火球を一斉に発射しようとする。

（少し……無茶してみようかな？）

「デヤアア！！」

ネクサスはグランテラに走って行き、グランテラが発射した火球が1発だけ直撃するが、ネクサスは倒れず、ネクサスは空中に飛行。

グランテラの火球には追尾機能があるがネクサスはなんとか火球同士をぶつけ合わせ、最後の2発はネクサスの目の前で火球同士がぶつかり爆発。

グランテラが見る限りではネクサスが爆発に巻き込まれた様にも見える。

「ハアアア……シェア！」

両腕にエネルギーを溜めて腕を十字にして発射する必殺光線「ネオクロスレイ・シュトローム」をグランテラに向けて放ち、ネオクロスレイ・シュトロームはグランテラの身体を貫く。

「ギイイイイ！！！？」

グランテラは倒れ、青く輝き消滅した。

＊

ネクサスが戦ってる頃、外の世界では暗黒の雲がなのは達の前に現

れ、そこから黒い身体の巨大な芋虫のようなものが現れた。
それは……、マミのいた世界でヒメヤが変身したウルトラマンネクサスが倒した筈の……。
「魔女・シャルロッテ」だった。
だが、このシャルロッテは魔女では無い。
「インセクトタイプビースト・シャルロッテ」である。
「あれも、ビースト……！？」
シャルロッテはグランテラと同じく街を目指す。
『なのは！　行くぞ！』
「えっ？　あっ、うん、ゼロ」
なのはは左腕の銀色のブレスレットからメガネ型のアイテムを出した。
「ねえ、昔から言うけど変身する時アレ言わないとダメ？」
『言わねえとカッコつかねえだろ』
「……うん、分かった」
なのははそのメガネ型のアイテム「ウルトラゼロアイ」を目に装着する。
「デュア！！」

なのはは光へと包まれ、ゼロの姿となり頭の上にゼロスラッガーが装着され、シャルロッテの前に「ウルトラマンゼロ」が現れる。

「此処から先は……一歩も通さないぜ！！　デュア！！」

ゼロはシャルロッテに向かって行き、シャルロッテの顔面を殴りつける。

「キシャアアア！！！」

しかし、シャルロッテは口から巨大なイチゴをゼロに発射し、ゼロに直撃するとそのイチゴは爆発。

「デュワッ！？」

ゼロスラッガーを持ち、シャルロッテにゼロは斬りかかるがシャルロッテはくねっと妙な動きをしてゼロの背後に回り込み、ゼロの右肩に噛みつく。

「デュア！！？」

しかし、そこで金色の砲撃がシャルロッテに直撃し、シャルロッテはゼロから離れる。

ゼロはフェイトにサムズアップし、フェイトもサムズアップで返した後、ゼロは腕をL字に組んで発射する必殺光線「ワイドゼロショット」をシャルロッテに発射し、ワイドゼロショットはシャルロッテの身体を貫き爆発四散した。

「トドメだァ！！」

「キシャアアア！！！！？」

＊

その後、マミはみんなよりも先に六課へ戻っており、フェイトに案内されて自分の部屋を紹介して貰った。

その部屋にマミは1人、ベッドの上で寝ている。

（早く、見つかるといいな、私の世界）

それだけを思い、マミを眠りについた。

## 3話　『魔女ビースト』（後書き）

はい、という訳でなのははゼロでした～。
因みに言うとなのはがゼロなの、みんな知ってます。
エリオ、キャロ、ティアナ覗いて。
スバルは火災の時に既に知ってたりします。
あの1人、原作キャラでウルトラマンになるキャラいるかも？

## 4話　『ハンターナイト・ツルギ』

今回、六課のメンバーは「ホテルアグスタ」と呼ばれるオークション会場にヘリで向かっており、シグナムとヴィータは既に待機しており、ヘリに乗っているのはユニゾンデバイスと呼ばれる小さい少女の姿をした「リインフォース・ツヴァイ」であり、他にははやて、なのは、フェイト、フォワードに医務室担当の白衣を着た女性「シャマル」、そしてマミが乗っていた。

リインが一同に今回の仕事の内容を説明。

次に空中にモニターが映り、そこにはいかにも怪しい研究などをしてそうな男性「ジェイル・スカリエッティ」の顔写真が映った。

フェイトによれば、彼はガジェットの制作者及びガジェットの事件の主犯であり、レリックを狙う人物で違法研究で指名手配犯であるということが説明される。

ガジェットとはジェイルが開発したメカのことであり、レリックを狙うメカである。

そして今回、オークションのロストロギアをレリックと誤認したガジェットを撃退するのが今回の任務。

「こっちは主に私が捜査を進めてるんだけど、みんなも一応覚えておいてね？」

フェイトがそう言うとフォワード陣とマミは「はい」と答える。

「それにしても、ロストロギアって危険な兵器なのにそんなものをオークションに出していいのかしら？」

不思議そうに首を傾げて疑問を口にするマミ。

「あぁ、ちゃんと危険じゃないものを出してますから平気ですよ？」

なのはがそう説明し、キャロはシャマルの隣に置いてあるケースが気になっていた。

「あの、シャマル先生。　そのケースってなんですか？」

「あぁ、コレ？　隊長さん達とマミさんのお仕事着」

ニコニコ笑いながら答えるシャマルに、マミは「えっ？」となる。

ホテルアグスタに到着した後、フォワードは外の警備に当たり、なのは、フェイト、はやて、マミは綺麗なドレスを着用し、中の警備に当たっていた。

ドレスを着たマミ達は、歩くたびに男性陣の注目をかなり浴びており、マミは若干恥ずかしそうにしていた。

（うう……なんか恥ずかしい／／／／）

そこでマミはそう言えば……と思いだし、何故今回は自分も来れたのだろうかとはやてに尋ねた所……。

「いや、マミさんの恥ずかしがる所見たくて……」

一瞬はやてを殴ろうかと思ったマミ。

「冗談や冗談！　もしも怪獣とか現れた時マミさんのアドバイスとか聞けるかな思って！」

アハハっと笑って誤魔化すように言うはやて。

『中々似合ってるじゃねえか、なのは』

「にゃ／／／ゼロ！？／／／」

なのはの中にいるゼロがなのはに話しかけてきた。

「えっ？　ゼロ？」

マミはまだなのはがゼロである事を知らず、またマミがネクサスということはこの世界ではまだ誰も知らない。

その為、はやてとフェイトが急いでなんのことかを隠した。

（それにしてもなのはちゃん褒めてくれる人がおってええな～）

（シュンがいたらなんて言ってくれるかしら……）

上から順にはやてとマミがそんな事を思っていた時、フェイトが人懐っこそうな顔をした幼い雰囲気が漂うタキシードを着た1人の青年とぶつかってしまう。

「「あっ、ごめんなさい！」」

フェイトと青年は互いに謝る。

「すいません、前方不注意で」

「いえ、こちらこそ」

青年とフェイトがそうやって互いに謝り合っており、それがしばらく続いたとか……。

「そう言えば、ティアナの訓練を見て思ったんですけど、ティアナはなにか合ったんですか？」

マミの質問に、なのはとはやては黙りこむ。

フェイト？　まだやってますよ。

「うーん、まあ、実はな？」

＊

その頃、ガジェット達が近くの森に出現し、シグナム、ヴィータ、青い狼、「ザフィーラ」がガジェット達と戦っていた。

しかし、シグナム達は順調にガジェット達を倒して行ったが、小さな虫のようなものがガジェットに憑依し、ガジェット達がパワーアップした。

「なんだ？　急に動きが……」

ヴィータが疑問を呟くが、それでもシグナム達が不利になる事は無く、ガジェット達は着々と殲滅されて行く。

「もしや」

ザフィーラは何かを感じ、その勘が的中することになる。

＊

森の中に隠れてながら、紫の長い髪の少女「ルーテシア・アルピーノ」と大柄な男性「ゼスト」がアグスタの様子を伺っており、実は先程のガジェットのパワーアップはルーテシアによるものだった。

ルーテシアは黒い身体を持つ「ガリュー」が召喚し、ガリューに指示を出してアグスタの駐車場に向かって行った。

アグスタでフォワードが警備に当たっている場所の近くでいきなり魔法陣が出現し、その中からガジェットが突然現れる。

「これは、召喚魔法！？」

「召喚魔法ってこんなことも出来るの！？」

エリオとスバルが驚く。

「優れた召喚魔導師は、転移魔法のエキスパートでもあるんです」

そう説明するキャロ、ティアナは銃型のデバイス「クロスミラージュ」を構える。

「なんでもいいわ。　狙撃行くわよ！！（証明するんだ、私の力を！）」

フォワード達もまた、ガジェット達に戦いを挑む。

＊

『ドクン』

「ッ！」

マミはエボルトラスターが心臓のような音を鳴らし、エボルトラスターを取り出すと何かに反応していた。

それはなのはも同じであり、左腕のウルティメイトブレスレットも少し光ってなにかに反応していた。

「マミさん、それ、なんですか？」

フェイトがマミにエボルトラスターのことについて聞いてきたが、マミは「え、えっと！」と慌て、誤魔化す為にトイレに行く不利をしてその場から離れた。

＊

「お、おい、シグナムあれ！」

森の中、ヴィータが指差す方向にはゼロが倒した筈のビースト化した魔女、「インセクトタイプビースト・シャルロッテ」とネズミの様な赤い身体を持つ「フィンディッシュタイプビースト・ノスフェル」が出現し、アグスタに向けて前進していた。

「「ギシャアアア！！！」」

マミはエボルトラスターを引き抜き、掲げる。

「うおおおお！！！」

光へと包まれたマミは「ウルトラマンネクサス・アンファンス」に変身し、シグナム達の前に現れた。

「シェア！」

アームド・ネクサスから光の刃「パーティクルフェザー」をノスフェルとシャルロッテに直撃させる。

「「シャアア！！？」」

ネクサスはシグナム達に向かい振り返り、シグナムとネクサスはし

ばらく互いを見つめあった後、シグナムはなにかを感じてアグスタの方へヴィータ達と共に行くことにする。

ネクサスは再びノスフェルとシャルロッテの方を向く。

（シャルロッテ……どうしてこの魔女が……？）

ネクサスはジュネッスシルバーへとスタイルチェンジ。

腕を振り上げてメタフィールドを展開し、その中でネクサスは戦う。

「シュワッ！！」

ネクサスはジャンプしてノスフェルとシャルロッテの間に立ち、素早く2体の腹部にパンチを炸裂。

シャルロッテがネクサスの首目掛けて噛みつこうとしてきたが……。

「もうあなたなんて怖くないのよ！！」

強烈な蹴りを喰らわせ、大きく吹き飛ぶシャルロッテ。

「ギシャアア！！」

ノスフェルがネクサスの背中をその鋭い爪で斬りつけてきた。

「デュア！？」

ネクサスはすぐにノスフェルから離れる、しかし、すぐ背後にはシャルロッテがおり、右肩に噛みついてきた。

「シュアアア！！？」

右肩から光が血の様に零れるがなんとかシャルロッテの頭を掴み、背負い投げのようにシャルロッテを持ち上げて地面に叩きつけた。

「シャアアア！！？」

そのままシャルロッテを再び持ち上げて空中に放り投げるとネクサスは腕をL字に組み発射する必殺光線「オーバーレイ・シュトローム」をシャルロッテに発射し、シャルロッテは空中で爆発したが、爆発する寸前シャルロッテは脱皮して消滅しなかった。

実は以前のゼロとの戦いも今と同じようにして素早く地中に潜り、逃げていたのだ。

（そんなっ！？）

「グオオオオ！！！」

ノスフェルがネクサスの背後から迫りくるが、廻し蹴りをノスフェルに決める。

地上へ戻ってきたシャルロッテは何度もネクサスに噛みつこうとする。

シャルロッテの顎にネクサスはアッパーを決める。

「グシャアア！！？」

＊

その頃、地下駐車場でガリューがある物を盗み出しており、そこへ意識を一時的にゼロに譲ったなのはが現れる。

「あ～、動き辛いったらありゃしねーな！」

Ｚ（ゼロ）なのはが愚痴を溢し、ドレスな為に動き辛い思いをしていた。

『そんなこと言っても仕方ないじゃん！　それよりゼロ！』

（あぁ）

心の中で会話しながらＺなのははウルトラゼロアイを折り畳んだ「ウルトラゼロアイ・ガンモード」を取り出し、ガリューに銃口を向ける。

（おかしいな、確かにこの辺にウルティメイトブレスレットがなにかを感じたのに、こいつからじゃない？）

Ｚなのはは疑問に思いながらもガリューになにを盗み出したか尋ねる。

「……」

しかし、ガリューは何も答えず、その場から離れようとする。

その時、青い光弾がZなのはの足元に放たれ、Zなのはは周りを見回すと短剣を持った男性がいた。

暗闇で顔はよく見えなかったが、その隙にガリューは逃げ去り、追いかけようとするも男性の放つ光弾に邪魔され、ガリューを逃がしてしまった為、まずは男性から捕まえようとする。

しかし、男性はZなのはから逃げるように走りだし、森の中へと入る。

男性は右手に出現させた青いブレスに、短剣を差し込むと男性は黒い光に包まれ、以前ネクサスの前に現れた等身大の騎士の様な格好をした戦士に変身した。

名を「ハンターナイト・ツルギ」である。

『あれもウルトラマン！？』

「さあな。　だがやる気満々みたいだぜ？」

ウルトラゼロアイを通常形態に戻し、目に装着する。

「デュワッ！！」

Zなのはは光に包まれ、「ウルトラマンゼロ」に変身。

「「シェア！！」」

ツルギとゼロは互いに走り出した。

同時に互いの身体を殴りつけたのだが、ゼロが一方的に殴り飛ばさ

れ、対するツルギはビクともしていなかった。

（あの鎧か）

ゼロスラッガーを手に取ってツルギに投げ飛ばすが、ツルギは右腕に装備された「ナイトブレス」から光の剣「ナイトビームブレード」を出しゼロスラッガーを弾く。

ゼロスラッガーをゼロは操りながらツルギを攻撃しているのだが、その全てが弾かれ、ツルギはナイトビームブレードの先端から放つ光弾「ブレードショット」をゼロに放ち、ゼロは両腕を交差し、ブレードショットはゼロに直撃して吹き飛ぶ。

「ぐわあああ！！？」

ゼロスラッガーは彼の頭の上に戻る。

「やるじゃねえか。　シュア！！」

ゼロは素早い蹴りをツルギに喰らわせ、ツルギはゼロと距離を取り、ナイトブレスに青い雷が直撃してそれがエネルギーになってナイトブレスに宿り、腕を十字に組んで放つ必殺光線「ナイトシュート」がゼロに放たれ、対するゼロは腕をL字に組んで発射する必殺光線「ワイドゼロショット」を放ち、２人の光線がぶつかり合い、激しい衝撃波が起こった。

「デュワアア！！！？」

「グウウウウ！！？」

## 4話　『ハンターナイト・ツルギ』（後書き）

このツルギはゼロがいた世界とは別のです。
因みにこのツルギは原作キャラだったり、ゼストじゃないです。

## 5話　『無茶と憎しみ』（前書き）

ツルギの正体も明らかに。

## 5話　『無茶と憎しみ』

メタフィールド内。

未だに戦いは続いており、2対1の上にシャルロッテは倒される瞬間脱皮して復活し、ノスフェルも喉にある再生器官を破壊しなければ一時的に倒されても完全に倒すことは出来ない。

エナジーゲージも点滅しており、ネクサスの体力も限界だった。

「シャアアア！！」

シャルロッテがネクサスに飛びかかるが、ネクサスはシャルロッテを掴み、地面へと叩きつける。

「ヘアッ！！」
「シャア！？」
「キシャアアア！！」

ノスフェルがネクサスに体当たりを繰り出し、ネクサスは吹き飛ばされるが1回転して着地。

「シュア！」

しかし、シャルロッテが尻尾を使いネクサスの膝を叩きつけ、バランスを崩したネクサスはノスフェルの爪による攻撃を喰らう。

「グア！？」

再びシャルロッテがネクサスに噛みついてこようとするが、ここでネクサスはある事を気付いた。

シャルロッテは脱皮する時口から脱皮する。

つまり、縦に切裂いてしまえば中にいる本体ごと切裂くことが出来るのではないかと……。

「シェア！！」

ネクサスは右腕のアームド・ネクサスから光の剣「シュトロームソード」を装備し、こちらに襲い掛かってくるシャルロッテを縦に切裂いた。

「ヘアアア！！」
「シャアアア！！！？」

ネクサスの狙い通り、シャルロッテは切裂かれて爆発し、残るはノスフェルのみとなる。

「シュア！！」

ネクサスは強烈なパンチをノスフェルに喰らわせ、そこからジュネッスシルバーの能力の特徴であるスピードとパワーを合わせた攻撃、スピードとパワーがあるパンチやキックを次々ノスフェルに叩きこむ。

「ギシャアアア！！！？」

突如空中に暗黒の雲が現れ、ノスフェルはその中へと消え去る。

（逃げたのね……）

＊

一方、ツルギＶＳゼロの方ではまだ決着がついていなかったがツルギはナイトビームブレードによる攻撃の嵐、なんとか攻撃を避けるゼロだが、中々反撃に移行することができない。

「シェア！！」

ジャンプしてツルギの背後に回り込むゼロだが、ツルギはそれにすぐに反応して振り返ってブレードショットをゼロに放つ。

「デュア！？」

ブレードショットを受けたゼロは吹き飛ばされて倒れこむ。

「うぐ……」

立ち上がろうとするゼロだが、首筋にナイトビームブレードを突きつけられる。

「ッ！　へっ、それでもう勝ったつもりか……？」

「！」

ツルギはゼロをよく見ると、頭にあるゼロスラッガーが無いことに気付いた。

（何時の間に！）

ゼロスラッガーはツルギの背中を斬りつけ、右膝を突くツルギ。

「ぐおお！？」

ツルギはナイトシュートを足元に放ち、煙を立たせてゼロに目眩ましをしてその場から去って行った。

「チッ、逃がしたか」

＊

一方、ガジェットを殲滅していたフォワード達。

ティアナとスバルはコンビネーション技で一気に倒そうとする。

「クロスファイヤー……シュート！！」

スバルがウイングロードの上を走ってガジェットを引きつけ、その隙にティアナの技「クロスファイヤーシュート」という複数の魔力弾での攻撃がガジェットに次々命中する。

しかし、その1発を外してしまい、そのままスバルに一直線に向かってくる。

「あっ！？」

「スバル！」

だがそこに、ヴィータが現れてグラーフアイゼンで魔力弾を跳ね返し、その魔力弾は直撃を受けなかったガジェットに直撃、爆発した。

「このバカ！！　なにやってんだ！！？」

「ヴィ、ヴィータ副隊長……今のもコンビネーションの1つで……」

スバルがヴィータに言うが、ヴィータは……。

「ふざけろタコ！！　直撃コースだよ今のは……。　2人共引っ込んでろ！！」

その後、ヴィータの言われた通り、アグスタで待機してることになったティアナとスバル。

悔しそうな表情をするティアナに、スバルは励ましの言葉をかけるがティアナから怒鳴られ、スバルは黙りこむ。

（もっと、もっと強くならなきゃ……）

その後、ガジェットを一同は全て殲滅し、マミはアグスタに帰ろうとしていたが、先程の戦いでシャルロッテに噛みつかれた右肩から手が流れ、ドレスもボロボロである。

「流石に……今回はキツ過ぎたわね……」

息を切らしながら歩くマミ。

マミはそのまま森の中で倒れてしまい、気を失った。

「君、大丈夫かい！？」

そこへ先程フェイトと互いに謝り合っていた男性が現れ、マミを抱きかかえる。

＊

その後、任務を終えて帰還した六課メンバー。

医務室でマミは眠っており、目を覚ますと隣の机にエボルトラスターとデュナミストが与えられる武器「ブラストショット」が置かれていた。

「あっ、目が覚めた？」
「シャマルさん……」
医務室には当然シャマルがおり、この後、シャマルにあることを聞かれてマミはドキッとなる。
「どうしてあんな所でボロボロで倒れてたの？」
不思議そうに首を傾げて尋ねてくるシャマル。
言っていいのだろうかとマミは悩み、どうすればいいか目をグルグル回していた。
「ええっと……その」
この際バラすべきか……。
どの道何時かはバレるだろうと思い、マミは自分がネクサスであることをはやて、なのは、フェイトも呼んで話した。
「そう、あのウルトラマンはマミさんだったんだね……」
なのはが言い、なのはも自分がウルトラマンゼロと同化していることを話した。
「ウルトラマンってそんなことも出来るのね」
マミの世界のウルトラマンはこれといって同化とは別な感じな為、興味深く聞いている。

「そう言えば、ティアナはどうしてますか？」

ティアナについてマミは心配そうになのは達に尋ねた。

ティアナの兄、「ティーダ・ランスター」は自分の攻撃で負傷させた犯罪者を追っている途中、怪獣「ディノゾール」と遭遇した為、その怪獣殺害された。

そのディノゾールは無限のウルトラマン、「ウルトラマンメビウス」というウルトラマンが他の魔導師と協力して倒したが、上司はティーダに「犯罪者は死んでも捕まえるべきだった」と心無い言葉を口にした。

つまり、「役立たず」と言っているものと同じだったのだ。

その為、ティアナは兄の魔法が役立たずなんかじゃない、兄の魔法を証明する為に、ティアナはフォワードの中でも、無茶をしてでも強くなろうとしているのだ。

マミはティアナを探しに行き、外で自主トレをしているのを発見。

ヘリを操縦する男性、「ヴァイス」も彼女を止めたらしいが、結局ダメであった。

「ありゃ、なにを言ってもダメですね。　まるで聞きやしない」

ヴァイスはため息をつき、マミはヴァイスの右肩に手を置く。

「後は任せて。　私なりに、説得してみせるから」

マミは草むらで自主トレをしているティアナの姿を確認。

「ティアナ……、なにをしてるのかしら？」

「マミさん！　なにって……自主トレですよ。　凡人だから私が１番努力しないといけないんです」

いきなりマミが現れたことに驚いたが、ティアナはすぐに表情を険しいものに戻し、自主トレに励む。

「あのね、ティアナ？」

マミはティアナに、自分がネクサスであることを話す。

実際に信じて貰う為、等身大のネクサスにマミは変身してすぐに元の姿に戻る。

ティアナは動揺していたが、すぐに気を取り直して自主トレに戻ろうとする。

「あなたがウルトラマンだからってなんなんですか？　私には関係ありません！」

「関係あるのよ、それが」

確かに無茶をしなければならないことはあるかもしれない。

しかし、ティアナの場合はやり過ぎだとマミは注意をするが……。

「だって、こうでもしないと！」

「あなたは今、憎しみで戦ってるのと変わらないわ。　昔の私と同

じようにね」
「……えっ？」
マミもダークザギ……「石堀光彦」の策略で憎しみによりネクサスに変身し、その為にマミは闇に囚われた。
だが、マミの前のデュナミスト、「ヒメヤ・シュン」が自分を助け出してくれたから、今の自分がいる。
「あそこでシュンが助けてくれなかったら、私はずっと闇の中にいたままだった。　今のあなたは憎しみに囚われてるが故に無茶をしてるのよ……」

＊

その頃、ある廃工場でツルギに変身していた男性とマミを助けたあの男性が対峙していた。
「メビウス……。　いや、その姿では『明日野（あすの）　未来（みらい）』だったか。
どこまでも俺の邪魔をするのか？」
「ツルギ、その身体を返すんだ！　君は、その人間と強制的に同化

した、きっとその人の家族が心配してる！」

男性は短剣「ナイトブレード」を取り出し、そこから青い光弾を未来に放った。

未来は左腕に赤いブレス、「メビウスブレス」を出し、光の刃「メビュームスラッシュ」を放って相殺。

「この身体はまだ必要だ。　この男の……『ティーダ・ランスター』の身体は……」

## 5話　『無茶と憎しみ』（後書き）

さやか
「ティーダさんがツルギかい！」

まどか
「随分長い間同化してるんだねぇ」

ヒメヤ
「所で……最近サーガで盛り上がってるのに、この作品、ダイナとコスモスの登場予定は一切無しなんだよな……」

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6364y/

ウルトラマンネクサス☆マギカStrikerS

2011年11月26日16時50分発行